
罪深く悩み多き我等

悠羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪深く悩み多き我等

【Nコード】

N5161Z

【作者名】

悠羽

【あらすじ】

銀時と土方。

短(?) 編集

BLですよ。

夢で違えたら（前書き）

受け攻めは固定していません。

作者のノリとテンションにより設定変わります。

夢で逢えたら

・夢で逢えたら・

原作設定

もう付き合ってます

「何がそんなに気に入らねえってんだこのクソ天パあ！ふざけんな
っ！俺はもう帰るからな！」

「ああ帰れ帰れ！清々すらあニコマヨラあ！」

そう言っただけでケンカしたのは今日の昼下がりに。

きっかけは些細な事だったのに、そこは素直じゃない二人の事。

売り言葉に買い言葉でとうとう土方は帰ってしまった。

そんな今日のやり取りを思い出しながら

「けどよぉ…、何もホントに帰る事無いじゃん」

土方君よお

と呟いても差し込む夕日に吸い込まれて。

ソファでゴロゴロ寝返りを打ちながら考える事は土方の事ばかり。

ああダメだ。こんなんじゃ何かダメだ。

「ま、過ぎた事はしょうがないってか」

まるで自分に言い聞かせるように口に出し、俺は万事屋を後にした。

「あゝ、ちょっと飲み過ぎたんじゃねえの？」

万事屋を後にした俺は一人で飲みに出掛けたのだが、飲んでも飲んでも考えるのは土方の事ばかり。

千鳥足で家路を辿る間に考えるのもやっぱり土方の事。

…やっぱり今日のは俺が悪かったよなあ…

きっかけはホント些細な事。

たまたま街で見掛けた土方君が、沖田君の頭を撫でていただけ。

柔らかい笑顔で。

まあ土方からしたら沖田君は弟みたいなものなんだろうけど…

あんな顔見れんのは俺だけだと思ってたんだけどなあ…

そしてその後万事屋に顔を出した土方に理由も言わず八つ当たりして…

うん、やっぱり俺だわ。悪いの。

でも謝んのはなあ…

何て考えてながら階段を昇ると

「じゃあ」

玄関の前に

黒い塊がいた。

何だこりゃと近づいて良く良く見てみると

「じゃあ」

真っ黒い子猫だった。

「何？お前俺に飼われたいの？ダメダメ。ウチには育ち盛りの犬と小娘がいるんだから」

そう言いながら玄関を開けると

「こい」

俺の足元をすり抜けて家の中へ入って行ってしまった。

「ちょっともうダメって言ってんじゃん」

なんて言いながら子猫を抱き抱えると

真っ黒で艶々の毛並、シャープな体つき、刃色の瞳

…なんか土方みたい。

一度そう思ってしまったらもう土方にしか見えず。

しかもいつの間にか土方の定位置にちょこんと座ってるし。

「……土方……？」

「にゃあ」

「……んな訳やねえよなあ」

あゝ、俺相当酔ってるわ。

頭をがしがし搔いて風呂の準備に向かった。

風呂の湯が溜まる間に子猫にミルクをやってみた。

「うまいかあ？」

子猫はチラリと此方を見て、またミルクを舐めている。

その様を眺めていると自然に頬が緩む。

可愛いなあ、おい。

今日は神楽も定春も居ねえし、

「じゃあねえから一晩泊めてやるよ」

「ちょ、コラ暴れんたって！」

折角だから洗ってやろうと一緒に風呂に入ったはいいのだが

「ぶにゃああ！」

やっぱり水は嫌いなのか震えるし逃げ回るし。

「お前洗わせねえと一緒に布団入れてやんねえぞおお！」

堪り兼ねて怒鳴ったら急に大人しくなりやがった。

その隙に体を洗ってやり、一緒に湯船に浸かる。

「そっだ、一晩とはいえお前に名前付けてやるよ」

うーん、タメゴロウ？黒いからクロ？それともタマ？

……トシ……とか？

「……トシ……？」

恐る恐る呼んでみる。

「トシ？」

普段は恥ずかしくて呼べない名前を付けちゃった。

「トシ」

「じゃあ」

「トシ」

「じゃあ」

じいぞとばかりに呼んでみる。

「……土方……」

トシは首を傾げて俺を見ている。

アイツは、土方はまだ怒ってるかな？

「土方：今日は俺が悪かったよ。」

「こい」

「なぐんで、お前に言ってもしやあないか」

さ、上がるぞ

と俺はトシと風呂を出た。

風呂から上がり、トシをドライヤーで乾かしていると、

「あ、」

そうだ

急に思い付いて机の引き出しを開けた。

中から取り出したのは、鈴。

下のババアが温泉行った時の土産のキーホルダーだ。

「トシ、じつとしてるよ」

その鈴を紺色のリボンに通し、首に結んでやる。

「おお、お前似合っじゃん」

頭を撫でてやると、喉をゴロゴロ鳴らし擦り寄ってきた。

「アイツもお前みたいに素直だったらなあ。まあ素直じゃねえのはお互い様なんだがよ。」

「じゃあ」

「何て言うか…俺ばっか好きなんじゃないかって、土方にとって俺は別に特別でも何でもなくて…何て考えたりさ、しちやう訳よ。」

「こい？」

「やっぱ俺、相当土方が好きなんだろうなあ。まあ絶対本人には言えねえけど。」

トシの頭を撫でながら苦笑い。

「あゝあ、アイツもトシって呼んでみてえよ。んでもって銀時、なんて呼ばれてえよ。」

ま、無理な話だろうがな。

「ホントは俺ももっと素直になりてえんだよ」

ホント、いつの間にこんなに惚れちゃったんだろう。

「…苦しいよ。好きなんだよ…」

何時から俺はこんな女々しくなっただろう。

「全部お前のせいだからな…土方…」

「じゃあ」

土方にもこんな風に言えたらいいのに。

トシが土方だったらしいのに。

「も、寝ようか」

どンドン切なくなってきた俺は、トシを抱き締めて布団に入った

夢を見た。

トシが土方の声で喋っていた。

俺の頬を舐めながら銀時、銀時って何度も。

それはとても優しい声で。

舐める度に首の鈴がチリンと鳴って、舌がくすぐったくて、そしてとても嬉しかった。

「トシ…」

「お前えらモタモタしてんじゃねえっ！」

「裏だ！裏へ回り込め！」

窓から聞こえる物騒な声に目を開けると、外はもう明るかった。

「桂ああ！今日こそは逃がさねえぞ！」

よろりと起き上がり窓から覗けば、黒い集団が捕物帖を繰り広げていた。

そして先頭で指揮をとる愛しい人。

頬杖をついて暫く眺めて、はっと気が付いた。

「そうだ、トシは？」

布団を捲っても、ソファの上にも何処にも居なかった。

「トシ…」

きつと空いていた窓から出て行ってしまったのだろう。

「ま、元々一晩の約束だしな」

一抹の寂しさを振り払う様に言い、もう一度布団へ潜り込んだ。

ジリリリン…ジリリリン…

次に目を開けるともう夕方だった。

無理矢理体を起こし、受話器を取る。

「はい、万事屋銀ちゃんです」

『今日アネゴがすき焼き食べに連れてくってゆーから今夜も帰らないネ』

それだけ言っと切れてしまった。

「そうかあ…今夜も一人かあ」

また飲みに行くかなあ。

なんて受話器を持ったままぼんやり考えていると

「なんだ、今日はチャイナは居ないのか」

急に後ろから声がして

「っ！」

慌てて振り返ると

「チャイナの癖に気が利いてるじゃねえか」

玄関に寄り掛かり、ニヤリと笑う土方が。

「土方…」

びっくりして言葉が続かない俺に、土方はこう言った。

「ああ？土方あ？トシって呼べよ。…昨夜みてえによ」

な、銀時

何時もより少し優しく笑う土方の刀には、紺色のリボンで結ばれた鈴が光っていた。

ある朝の会話

- ある朝の会話 -

「ねえ、」

まだ薄暗い朝方の安宿。

布団の中の俺は、見慣れた隊服に袖を通す土方に声を掛けた。

「ああ？」

支度する手は止めず、土方はチラリと此方を見た。

「ねえ、俺達ってどーゆーカンケイ？」

「は？何言ってるんだ？てめえ」

慣れた手付きでスカーフを巻きながら返される。

だけど俺は更に聞いてみる。

「カラダだけ？ 爛れたオトナのカンケイ？」

土方は黙々と支度を続けている。

何となくカラダを重ねる様になって早半年。

週に3日の時もあれば2週間連絡無し的事もある。

その間、付き合うとか、そんな話になつた事はない。

ただ逢つて、抱いて抱かれるだけ。

「ただの性欲処理？」

更に俺は続ける。

だってこれ以上はもう無理。

気付いちゃったんだよ、自分の気持ちに。

「それとも暇つぶし？」

「じゃあアレだ。何かの罰ゲームとか？」

ヤバイ

自分で言ってる癖に泣きそうだ。

泣いてるなんてバレたくなくて俯いていると、

「バカかテメーは」

ため息混じりの声が出た。

「だよー。何の意味も無い事なのにねー」

少し震える声で答えて、それでも顔を上げられずにいる俺に土方は告げた。

「…何でその中に『俺がテメーを好きだから』って選択肢がねーんだよ」

好き？誰が？誰を？

えええっ？

ハツとして顔を上げると、土方は準備を終え出ていく所だった。

「今夜、行くから予定開けとけ」

そう言っ出ていく土方の頬は少し赤かった。

その後ろ姿を暫く眺めて、またもそもそと布団に潜り、漸く俺は理解した。

『ひょっとして…こねって告白ってヤツっ！？』

マジで？

期待しちゃうよ？

あー、銀さんニヤけちゃうんですけどぉ！

そして俺はいそいそと万事屋へ戻り、土方の為にマヨネーズ料理を作るのかなんて考えるのだった。

路地裏の悲劇

- 路地裏の悲劇 -

がさり…

身を隠している植木が思いの外大きな音を立て、心臓がどきりと鳴る。

気付かれたのではないかと標的を見れば、

「あら、パー子じゃない」

見た事無いようなモンスターに話し掛けられていた。

しかしやけにアゴが特化したモンスターだ。

危険か？

斬るか？

そう迷っているうちに、標的は一言一言モンスターと会話を交わしまた歩き出した。

俺は植木から素早く抜け出し、建物の影から影へ身を隠しながら標的を追った。

静かに、気配を殺しながら影から影へ。

『これじゃ鬼の副長どころか猫の副長じゃねえか』

心の中で呟き、舌打ちする。

ちなみにこれは偵察の仕事ではない。

んなもんは山崎にやらせりゃあいい。

『ああ、何でこんな事になってんだ』

今朝の巡回の途中、前から歩いてる来たアイツを見付けた。

今日こそは想いを告げる。

そんな覚悟で屯所を出てきていた俺は咄嗟に建物の影へ隠れた。

通りすがりを路地裏へ引き込んで告げようと思ったのだ。

しかし俺も気が動転していたのだろう。

気が付くとアイツは通り過ぎていた。

しまったと思い、何とかチャンスを窺いながら後を付け始め、今に至る訳だ。

『しかしホントうろろろフヨフヨしやがってあの天パ』

想い人であるにも関わらず悪態をつく。

『一体何の目的で何処へ向かってんだ。ってか誰だその男！ヤケに親しげじゃねえかあ！あつ、肩なんか組みやがって！俺の銀時から離れるやこのマダオがああ！』

叩っ斬ってやる！

そう思い、刀に手を掛け路地裏から飛び出そうとしたら

ドンッ

何かにぶつかった。

低い姿勢で飛び出した為か、目の前に見えるのは黒いブーツ。

徐々に視線を上げていくと。

白に着流し。

腰に木刀。

この辺から背中をイヤな汗が伝い出した。

片腕を抜いただらしない着こなし。

紅い瞳。

ふわふわの銀色。

「何人の後コソコソ付けてんだ。ストーカーですかコノヤロー」

みつ、見付かったアア！

「あー…いや、その、これはだな」

チクシヨウ、上手い言い訳が見付かんねえ。

「やっぱストーカーの部下はストーカーですかあ？」

「てめっ、俺を近藤トコシと一緒にすんなああ！」

いや、待てよ十四朗。

これは逆にチャンスじゃないか？

廻りには誰も居ない路地裏。目の前には想い人。

今だ！言うんだ俺！

「あー、俺はただ、お前によお……」

何？という感じで首を傾げ俺を見る銀時。
そんな顔すんな可愛いじゃねえかあ！

「お前に、よ……」

顔が熱くなるのが解る。

やべえ、何て言やぁいいんだ。

何も上手い言葉が見付かんねえ。

銀時は腕を組んで、俺の次の言葉を待っている。

「その、だな…」

あああ、頭の中が真っ白だ。

何でこんな窮地に立たされてんだ。

敵前逃亡は土道不覚悟だと解っている。

だが…だが言えねえ。

たった一言でいいのに。

「っ、何でもねえ」

言うが早いか俺は走り出していた。

「え？おーい大串くーん？」

銀時の声が聞こえたが俺の思考回路はもう限界突破。

「今日の事はぜってえ忘れろよおお！この糖尿天パがああ！」

チクシヨウっ！こんなはずじゃなかったのに！

叫びながら、泣きながら、俺はひたすら逃げた。

おまけ

走り去る土方を俺は暫く眺めていた。

「…何だっつてんだ」

頭をぼりぼり搔いて、またふらりふらりと万事屋へ戻る。

アイツが今日言おうとしたことは大体予想は付いてる。

そんなの、毎日アイツを見てたら解る。

ふとした仕草で、目線で。

「ホント、変なところで臆病なんだよなあ、アイツ」

言えばいいのに。

俺はぜってえ断らないからよ。

スノードーム(前書き)

-スノードーム-

スノードーム

さく…さく…さく…

俺はただ、歩いていた。

一面真っ白な世界を。

前を歩く男の白いブラウスが雪に溶け込む。

しかしその手は俺の手をしっかりと握り、

背中は吹き荒ぶ雪にかき消されそうで。

「どっか、このまま…」

小さな咳きは届く事無く、俺は肩に掛けられた隊服を強く握った。

『銀さん、神楽ちゃんが…!』

昨夜新八が万事屋へ電話を掛けてきた。

定春と雪遊びで山へ行っただまま帰らない、と。

『雪も強くなってきたるし、まさか何処かで道に迷っているんじゃない？』

俺は万事屋を飛び出した。

さく…さく…さく…

前を歩く男が此方を見ずに言った。

「寒くねーか？」

「……うん」

お前の方が寒いだろ、なんて言えなくて。

・ 神楽を探しに出た俺は案の定迷ってしまい、山の洞窟でしゃがみ込んでいた。

「…寒い…」

感覚の無くなつた指先を吐く息で暖める。

外は一寸先も見えない程の吹雪。

思い出すのは想い人の事ばかりで。

ああ俺、此処で死ぬのかなんて冷静に考えた。

愛煙家で、マヨラーで、口の悪い、でも優しいアイツ。

伝えられなかった想いは涙に変わり

「…ひ、じかたあ…」

こんな事なら伝えておけばよかった、と少し後悔し

俺はゆっくり目を閉じた。

「もうすぐ麓だから」

その声にはっとして前を見る。

少し此方を向いている顔は、優しく微笑んでいて

「…うん」

俺は俯いて、繋いだ指に力を込めた。

「…ずや、…万事屋！」

遠くから声が聴こえる。

「万事屋！……銀時！」

ああ、これはアイツの声だ…

じゃあ今、肩を揺さぶっている手もアイツなのかな。

だったらいいな…。

まだはつきりしない意識の中でそんな事を思う。

「銀時！しっかりしろ！」

一層激しく揺さぶられ、はっと我に帰った。

まだ重い瞼を開けると

「銀っ…！良かった…」

震える声で強く抱き締められた。

「ひじ…かた…？」

小さくその名を呼べば抱き締める腕に力が入る。

「ひじかたあ…」

その腕が、声が、体温が、土方の想いを伝えているようで、

切なくなり、また少し泣いた。

さく…さく…さく…

「なあ
」

土方の歩みが、少しだけ遅くなる。

「もしも、このまま…」

口籠る土方。

その先は聞かなくても解る。

だって俺も同じ気持ちだから。

だけど…

「それは出来ねえよ」

もしも、このまま二人で居られたら

そんな願いを叶えるには、俺達は守る物が増えすぎた。

常に争いに身を置く土方にとって俺の気持ちは足枷でしか無く、そのせいで命を落とすかも知れない。

そう思うと気持ちを伝えるのは躊躇われ、

そしてきつと、土方も同じ事を思っている。

解ってる。

だけど、だけど

「だけど…、もう少しだけ…」

目を伏せ、深く指を絡ませると、

「ああ…」

より強く握られ。

そこから土方の想いが流れ込んできて

胸が苦しくなった。

「…ちゃん！」

「銀さん！」

「トシー！」

遠くから声がする。

そしてだんだん近くなる。

俺達は顔を見合わせ微笑み合い

静かに、決意を込めて指をほどいた。

暗い夜道と恋の華

- 暗い夜道と恋の華 -

夜も更けて来た頃、

此処は真選組屯所副長室。

目の前には大量の書類。

俺は事務的に判子を押しながら時計を見た。

午後8：57

そろそろだな。

俺はコートを羽織り、副長室を後にした。

「さぶっ」

吐く息が白い。

屯所の門を出て、何時もの道に行く。

『まるで逢い引きだな』

心の中で呟いて

- 逢い引き、

その響きが満更じゃない自分に驚いてみたり。

気を抜くと直ぐに緩んでしまふ頬を引き締め、何時もの曲がり角を曲がる。

そして目に飛び込んで来るのは、明るい自動販売機の明かりと、

寒そうに佇む男。

「よお」

「ああ」

決して約束している訳では無い。

「何、お前また煙草買いに来たの？」

俺はたまたま通り掛かったっやってさ。

そう言ってるが、コイツは毎日此処へ来ている。

そして俺も。

「お前は毎日通り掛かったっちゃんだな」

少しからかう様に言えば

「悪いかよ」

そう言って顔を反らすコイツの鼻は少し赤くて。

そういえばさっきからしきりに指先を暖めている。

「この寒空の下、俺を待っていたのか。」

改めてそう実感し

『可愛いな』

何て思ってしまった。

思わず赤くなつた指先を掴んだ。

「ひゃっ!」

そんな声すら可愛く思え、指先を包んで暖めてやる。

「あ、あの…土方?」

困つたように上目遣いで俺を見る顔は見る見る赤く染まり。

「あの、もう大丈夫だから」

それでも俺は暖めて続ける。

「ね、土方……」

懇願される様に潤んだ瞳で見つめられ、俺はそっと指先を離した。

漸く指先を解放されたコイツは、それでもまだ暫く俺を潤んだ瞳で見つめ

「じゃ、俺もう行くから……」

そう言って背中を向け、歩き出した。

俺は何だか名残惜しくなってしまう

「なあ、」

声を掛けるとピタリと止まる背中。

「明日もまた、たまたま通り掛かってくれねえか？」

そんな事を口走る俺に、アイツは見た事無い位赤い顔で小さく

「おう、たまたまならな」

と返し、また歩き出した。

俺は暫くその背中を眺め

「早く明日にならねえかな…」

ひっそりと呟き、夜空を見上げた。

黒い欲、白い慈悲

- 密と蜜 -

ぬるい裏入ります

今日はずいてない。

仕事でミスし、財布を落とし、総吾のバズーカは直撃だ。

人生が思い通りにいくとは思って無い。

『だが一つ位、思い通りになることが有っても良いんじゃないか？』

44

そう思い、自分の下で乱れる男を見る。

「はあっ…あっ、んっ…ひじかたあ…」

綺麗な銀糸、妖しく光る紅い瞳、乱された着物から覗く白い肌。

その細い腰はねだる様に揺れている。

「何だ、まだ足りないのか？…相変わらずヤラシイな…」

そう耳元で囁けば涙を溢し恥じらって、俺の浅ましい欲が刺激される。

「ならば姫のお望み通りに…っ」

今までよりも深く貫けば

「ひっ、んっ…あっ、やっひじ…っんあっ、は、げしいっ…！」

しなやかに背中を反らせ喘ぐ。

「んっ、んあっ…きよっ、…ふあっ…なん、か…はげしっ…！」

潤んだ瞳で此方を見る様はとても淫らで、美しい。

・コイツは、俺のもんだ

その一心で腰を打ち付け、中を掻き回す。

「んんあっ…やっ！もっ…だ、めえっ…」

ここぞとばかりに腰の律動を早めると、限界を訴える悲鳴にも似た声。

・コイツのこんな姿、誰にも見せたくねえ

「…っ！ぎんっ、このまま…ヤリ殺しても…っ、いい、か…？」

思わず口をついて出た言葉に、自分で驚いた。

腰の律動はそのままに、銀時の反応を伺う。

紅い瞳はゆっくり動き、俺を見据え、こう言った。

「…んっ、土方がっ、あっ、そう、……したいなら…っあ、いいよ…」

…殺して…？

少し微笑んで俺を見る様は慈悲深い女神の様。

その言葉は俺の征服欲を満たすには十分で

「くっ…！ぎんっ…」

「あっ！ああんっ……ひじ…っ、かたあ…！」

俺はすがり付くように、銀時は包み込む様に抱き締め合い

「んっ…ふあっ、あ…ああっ…！」

「くっ…、はあっ…、くうっ…！」

會るよつに唇を求め合い

「はあっ…ひじかたっ、ひじかたあっ…っ！」

「っ、ぎんっ…ぎんっ…！」

互いの名を呼び合いながら、その後も繰り返して愛し合い、

俺の黒い欲は解き放たれ、銀時の足を白く汚していた。

妄想 炸裂

- 妄想炸裂 -

…ん？何か良い匂いがする…

トントン

ジュージュー

台所からだ。

今日は新八は休みだし、神楽は間違っても料理なんかしない。

じゃあ一体誰だ？

半分寝て、半分起きている頭でそんな事を考える。

チラリ時計を見れば朝の7時。

『誰だ？あーでも良い匂いだなあ…』

「銀っ！ぎーんっ、おーきーてー！」

俺はあのまま二度寝してしまったらしい。

誰かが俺を起こしている。

この声…

ん？この声はっ！

「もぉ〜、みんなっつては起きてよぉ」

「どぉしろぉ〜んっ」

そうだった。

俺達、夫婦になったんだった。

ってゆーことは

十四朗は

俺の…

「俺の嫁万歳っ！」

ガバツと飛び起き、抱き付いてそのままの勢いで押し倒す。

「やんっ、銀ってば…だめっ」

「だって十四朗可愛いんだもん」

何時もとは違う淡い水色の着流し、

ピンクのフリフリエプロン

何時もよりデレ度の高い甘えた声色。

これらを兼ね備えた十四郎は

無敵っつ！

「だからダメってば。お味噌汁冷めちゃっつよ？」

なあああにいい？

十四郎の手料理だとおっ？

俺の為にっ？

そんな…そんな事されたら…

「萌えーっつっ！！」

俺が叫ぶと、下の階から物音が。

そして玄関が勢い良く開いた。

「うるせええっ！こちとら夜の蝶は今から休むんだよ！静かにおしっ！」

「うつせえばあっ！こちとらまだ新婚ほやほやなんだよっつ！」
怒鳴り込んで来た下のばあを追い返し、俺は十四朗の手料理が並ぶ食卓に付いた。

「「いただきま〜す」「」

ご飯にお味噌汁、焼魚に玉子焼き。

何とも理想的な朝食。

ひたすらもぐもぐと食べていると

「美味しい？」

不安気に首を傾げて聞いてくるマイワイフ。

「ウマイよ、どれも」

「良かったあ」

安心したように笑うワイフを見て

『いや、ホントはお前の方を頂きたいんですけど』
などと考えたが口には出さない。

食後にゆっくり頂く事に決めているから。

「「ごちそうさまでした」「

食べ終わると十四朗は食器を片付けだす。

台所に立つフリフリエプロン装備の十四朗に、俺の妄想は膨らむばかり。

『今日は絶対エプロンプレイっ!』

そう心に固く誓っていると

「ぎん?」

いつの間にか片付け終えた十四朗が目の前に。

うーん、やっぱり可愛い。

「あ、お布団片付けなきゃ」

寝室へ消えていく十四朗。

あ、今から美味しく頂くんだからお布団片付けられたら困るじゃん。

そう思い、立ち上がるうとする

「ぎゅん…」

寝室から小さく呼ぶ声が。

何事かと思い、襖を開けると

「ぎゅん…」

何ということだ。

十四郎が布団の上に艶かしく座り、潤んだ瞳で俺を見ている。

「ぎゅん…、夜まで待てないい…」

良く見れば何時の間にやら裸エプロン。

『何この子可愛すぎなんですけどおおお！』

俺は全ての神に感謝し、恭しく手を合わせ宣言した。

「いただきます」

……つて夢を見ました』

「うぜええ！そして長えええ！！」

朝から珍しく電話を掛けてきたかと思えば

「この腐れ糖尿天パがああ！いつぺん死んでこいや！」

長々と語りやがってコンチクショウ。

『あーあ、夢の十四朗はあんなに可愛かったのになあ』

「だから俺を勝手に夢に出すな！」

『甘えた声でぎんぐつてさ』

あークソっ、本気でムカついてきた。

『素直で可愛かったなあ』

ブチンッ

自分の中で何か切れた。

「そんなの夢が良かったんなら…ホントに俺を嫁にしやがれクルクル天パがあっ！」

おまけ

その日の夜、

漸く仕事を終えて部屋には戻ると

「十四郎、結婚して下さい」

婚姻届と指輪を持って正装した銀時が待っていた。

哀と愛

- 哀と愛 -

解ってたんだ。

何時かこんな日が来る事。

「……………結婚、する事になった」

土方は俺の顔を見ずに、告げた。

「……………うん」

解ってたんだ。

でも覚悟は出来て無かったみたい。

俺、今普通の顔出来てんのかな。

「……………止めないのか？」

ああ止めたいさ。出来る事なら。

でも

「お前ももう良い歳だしな。丁度良かったんじゃない？」

出来ないんだ。

「はっ。お前にとってはそんなモンだったのか」

俺だけ本気になってバカみてーだ

自嘲気味に言い捨てる土方。

俺は何も言えなくて。

…胸が、痛い。

壊れそっだよ。

…そのまま土方は出ていった。

あれから土方から電話も来ない。

街でも会わない。

もちろん万事屋にも来ない。

土方はきつと俺の事嫌いになっただろうな。

「良かったんだよ…これで」

でも俺は好きままだ。

「やっぱ…結構苦しいな」

愛する人の来ない部屋で、鳴らない電話を見詰めて呟いた。

「銀さん聞きましたか？土方さん結婚するらしいですよ」

ある日、買い物から帰ってきた新八が言った。

「へえー、そう。まああんなマヨラーじゃ奥さん苦労するだろうな」

窓の外を見ながら、何時もの気だるい口調で言う。

「そして僕らも招待したいって、土方さんが」

にこやかに言う新八の手には、残酷にも3人分の招待状。

「銀ちゃーん。早く起きるアルー」

「銀さん、また飲みすぎたんですか？今日は土方さんの結婚式ですよ？早く支度して下さい」

月日が流れるのは早いもので、今日は土方の結婚式当日。

行きたくない

って言ったら子供みたいだろうか。

でも俺が行っても行かなくても、アイツは結婚してしまう。

そう仕向けたのは俺。

「おう、今起きるから」

行けば、俺の恋は終わるだろうか。

行けば、少しは楽になれるだろうか。

そんな事を考えながら、俺は出掛ける準備を始めた。

『それでは新郎新婦の入場です』

豪華な大きい扉が開き、ゆっくりと歩いてくる二つの影。
沸き起こる拍手。

ゴリラに至っては泣き出す始末。

一見、幸せそうな二人。

だけど気付いてしまった。

ほんの一瞬だけ、土方が泣きそうな顔で俺を見た事に。

それでも式はつつがなく進み、残すはケーキカットのみ。

『それでは、新郎新婦共にお色直しの為一旦退席致します』

「あー、俺ちよっとトイレ」

俺は席を立った。

「ちょっと、すみません困ります」

「や、ちょっと新郎と話したいただけだから」

「でも…」

「ほんのちょっとだけだから」

俺が来たのは新郎控室。

何とか係りの人を言いくるめてドアを開けると

「ぎん…とき…」

目を見開いて驚く土方が。

「折角の晴れの日なのにそんなシケたツラしてんじゃねーよ」

何？そんなに銀さんの事好きだったの？

言い終わらない内に、

土方に抱き締められた。

「銀、俺と一緒に逃げてくれ」

すがり付く様に俺を抱き締める土方。

ああ、土方はまだ俺の事好きで居てくれたんだ。

嬉しいなあ。

もう泣きそうだよ。

でも

「何バカな事言ってるんだ」

「わん…」

土方の目の涙が溜まる。

「お前は、結婚しなくちゃならねえ」

解ってんだろ？

子供に言い聞かせる様に背中を撫でながら言う。

真選組副長として、真選組を護る者として。

お前は、大事な物を護らなきゃならねえ。

その隣に俺が居ちゃいけないんだ。

俺の決意の固さが伝わったのか、もう土方は泣き言を言わなかった。

「じゃ、銀さん飲み過ぎちゃったんでもう帰るわ」

そう言い、泣きそうな顔を見られたくなくて背中を向けると

「わん…」

頬を両手で挟まれ

口付けされた。

「もう、最後だから。でも、今も本気で愛してる。お前が望むなら俺はこの思いを背負って生きていく」

別の場所で

そう言った土方の声は震えていた。

俺は土方の手をゆっくり離し、告げた。

「お前はもう十分色んなモンを背負ってる。そんな気持ちまで背負うことあねえ」

土方が俯く。

「その代わり、お前のその気持ちまで俺が背負って生きていく」

土方がはっと顔を上げたその時

コンコン...

「準備はお済みですか？」

二人ともドアを見る。

「もう時間切れみたいだな」

「銀……」

「お前の事を……俺はずっと見てるから、お前はお前の大事なモン、立派に護り通せ」

土方は暫く俺を見詰め、

小さく頷くと背中を向け歩き出し部屋を出て行った。

一度も振り返らずに。

これで良いんだ。

共に生きられないと知りながら、俺達は想い合って生きていく。

それはとても苦しく、しかし甘美な事で。

まだ土方の温もりが残る頬に触れ、小さく呟いた。

「土方、どうか…幸せに」

イブ イブ イブ2011

- イブ イブ イブ2011 -

バカツプルの会話のみ

「なあ、銀時…今日見廻り中に気付いたんだが今週末って、アレだよな」

「……アレ？」

「アレだよ、アレ」

「何かあったっけ？」

「ちょ、お前アレ解んねえの？今町中その話題だぜ？」

「だーかーらー、アレって何だっつーの」

「本気で言ってるのか？成る程…お前位のバカ天パになるとアレも解んねえのか」

「ちょ、それは聞き捨てならねえぞお！天パは今関係ねえだろうが！バカマヨ侍がああ！」

「おまえがあんまりにも解んねえからだろうが！」

「お前が回りくどいからだろうが！俺だってちゃんと言葉にして誘

われてえんだよバカ！」

「おまつ、解つてたんじゃねえか！」

「あーでもアレってなんだろうなあ？ちゃんと行ってくれないと銀さん解んなさーい」

「くっ…、今度の土日はクリスマスだから2日共予定開けとけ年中プータローがああ！！夕方迎えに来るからめかし込んで待ってるやああああ！」

「あークソやつぱ嬉しいじゃねえかバカヤロー！土方大好きい！」

「可愛いこと言うんじゃないじゃねえ！俺も好きだああ！」

重い 想い

- 重い 想い -

「あれ？大串くんじゃん」

夕暮れ時、市内見廻り中に声を掛けられた。

俺の事をそんな風に呼ぶのは一人だけ。

万事屋主人 坂田銀時

「あれ？聞こえなかったのかな？おーぐしくーん！」

「うるせええ！俺は大串じゃねえつつつてんだろ！」

何時もと同じやり取り。

コイツにとっては何でも無い事なんだろうが、

「そんな怒んなくてもいいじゃん。ニコチンばっか摂取し過ぎじゃねえの？」

俺にとっては特別なやり取り。

「お前みたいに糖分ばっか摂取してるヤツから言われたかねえよ」

俺は、このふらふらした銀髪ヤローが好きだ。

「じゃ、お仕事頑張つてねー」

手を振りながら去って行くアイツを見ながら、煙草に火を付ける。

好きだなんて、絶対言えない。

俺は臆病だから、今の生温い関係で満足だ。

だけどこの感情は日に日に大きくなり、どんどん重くなってきやがる。

こんな感情、燃えちまえばいい。

かぶき町を紅く染める夕日の中に。

病は気から

- 病は気から -

「銀時…お前は俺の心に咲く一輪の花だ…」

「ひじかたあ…好き。ホントに好きい」

もう夜だというのに明かりも付けず、薄暗い万事屋で甘い言葉を紡ぎ合う二人。

足を絡ませ、指を絡ませ、視線も絡ませている

土方十四郎と坂田銀時。

その二人である。

良く見れば二人共妙に顔が赤い。

鼻も垂れている。

でもそんな事はお構い無しだ。

「ねえ土方あ。ちゅうしてえ？」

「まったく…可愛い子猫ちゃんだな」

付けたままのテレビだけが二人を淡く照らしていた。

『…現在江戸を中心に猛威を奮っている謎の病気は蔓延する一方です。微熱、鼻水といった一見風邪の様な症状ですが、自分の思い、考えている事を洗いざらい話してしまうという特徴があります。現在治療法は確立しておらず、自然治癒を待つしかないようです…』

そして二人はテレビを消し、絡まり合ったまま布団へ潜り込んだ。

次の日も二人の愛は止まらなかった。

「なあ、銀時」

「ん？なあに土方あ」

「俺と…結婚してくれないか？」

鼻を垂らしたままのプロポーズ。

しかし銀時はホント一向に構わないように

「うれしいっ！土方愛してるうう！」

涙を溜めて抱き付いた。

「じゃあ、行ってくるから」

「うん、気を付けてね」

「ピンポン鳴ったりしても絶対に出たらダメだからな。ちゃんと戸締まりしてお利口にしてくれよ、ハニー」

「うん、行ってらっしゃい、ダーリン」

たかが役場へ行くだけなのだが。

「行ってらっしゃい」

銀時はずっと手を振っていた。

暫くして土方が戻って来た。

「お帰りなさい！寂しかったよお」

「ごめんな、銀時」

などと会話をしながらキスの嵐。

「でも、ほら」

土方が懐から取り出したのは婚姻届。

「土方あ、俺達、夫婦になるんだね」

「ああ、世界一幸せにしてやるからな」

そして二人はペンを取った。

数分後、書き終えた二人は感動に浸っていた。

「これ、出したら夫婦なんだね」

「おう、出したらお前は俺の嫁だ」

何だかバカ丸出しの会話であるが、当の本人達は至って真面目なのだ。

「ね、すぐに出しに行く？」

「いや、こーゆーのは大安吉日が良いんだ」

「わあ、土方物知りだねえ」

そして二人は書いた婚姻届を枕元に置き、今日も絡まり合いながら布団へ潜り込んだ。

翌日、先に起きたのは土方だった。

そしてふと気付き

「…なんだ？これ」

枕元の婚姻届を手に取り、絶句した。

「ぎ、ぎ、銀時いい！起きろ！起きてくれ！」

隣で寝ている銀時を揺さぶり起こす。

「もう、何なの土方。まだ銀さん眠いんですけどお」

「これ！これを見る！」

銀時の目の前に婚姻届を突き出す。

「はあああ？婚姻届え？誰と誰の」

「バカかお前は！名前を良く見る！」

そこに書かれている名は

土方十四郎（印）

坂田銀時（印）

- 後日談 -

ここはかぶき町役場。

二人の男が窓口へ訪れていた。

「あの…すみません。今のところこの国では男女間の結婚しか認められてなくて…」

「「ですよね」「」

酒と泪と男と男

「酒と泪と男と男」

「何だあ？もう飲めねえってのかあ？」

「ここは何時もの居酒屋。」

一人で飲んでたら、急にやって来て隣を陣取ったコイツ。

「あー…銀さん今日は一人で飲みたい気分なんですけどお」

「やんわりと断ってみたが」

「ああ？」

「一睨みされて」

「イイエ何でもありません」

「敢えなく玉砕。」

グラスを口に運びながら、チラリと隣を見遣る。

土方十四郎

俺の、好きなヤツ。

諦めようと思ってた。

だって俺みたいなおっサンから好かれても、土方が困るだろうから。

ただこんな事されたら諦め切れない。

無駄な期待はさせないでくれよ。

そう思いながらも俺の目は土方を見てしまう。

一体此処は何軒目だろう。

もうかなり酔ってるようだが。

「ってかそんなんでまだ飲めんのかあ？」

何時もの調子で話し掛けると

「ああ？俺はまだまだイケるぜえ？」

そう言つて一気にビールを飲み干した。

そして

「俺はよう、ただお前が一人寂しく飲んでんのが見えたから…：気になつただけだ」

それだけだかな

ちょっと照れた様にそっぽ向いていう土方。

やっぱり前言撤回。

俺を期待お前が悪いんだからな。

とことん好きでいてやるから、

覚悟しとけよ？

イブ 2011

- イブ2011 -

イブ イブ イブ2011の続き。

今日はクリスマスイブ。

土方は約束の時間になっても来なかった。

机の上に足を投げ出し、ジャンプを読みながら待った。

窓の外は見ない。

心底待ってるみたいで悔しいから。

時計がぐるぐる回る。

一時間…二時間…

土方はまだ来ない。

『仕事で何かあったのかな…』

じゃあもう今日は来ないかもね。

しゃーねえな。

「アイツは副長様だもんなあ」

年中暇人な俺とは違うんだよ。

「一人で飲みに行くか」

言ってみても、動く気にはさらさらなれなくて。

「…電話くらい出来るだろうがよ」

二時間半

鳴らない電話

土方は…

「…よっころせ」

俺は意を決し立ち上がりマフラーを手に取ると、浮かれた町へ出掛けた。

町はバカみたいに人が溢れていて、何だか一人は俺だけみたいに見える。えてきて。

俺は手早く用事を済ませ、逃げる様に万事屋へ戻って行った。

万事屋の玄関を開ける。

『ひよっとしたら来てるかもしれない』

俺の甘い期待はすぐに裏切られた。

だれも居ない部屋。

窓から無遠慮に入り込むイルミネーションの明かりが部屋を照らしていた。

「ま、解ってただけどね」

だけどね、土方。

早く来てよ。

俺、待ってるんだよ。

早く、来て。

俺は泣きそうな気持ちを押さえながら、さっき買ってきた袋を開けた。

ケーキ、チキン、大量の甘味、マヨネーズ、そして酒。

テーブルの上に並べ、暫く無言で眺めていた。

もうこんな時間だから、どこかへ飲みに行くのもしんどいし。

でもちょっと買いきちまった。

やっぱり土方が来てくれないと困るよ。

余っちゃつじゃん。

チツ…チツ…

時計の音が耳に付く。

あと少しで、日付が変わる。

そしたらもう、約束の日じゃなくなる。

あと五分

四分

三分…

ガラッ

突然玄関の開く音が。

「ぎゃっ」

すっかり油断してたから変な声が出た。

こんな時間に来るのは、アイツしか居ない。

「まったく、こんな時間にどちら様ですかコノヤロー」

不機嫌剥き出しで声を掛けると

「待ってたのか？」

走って来たのだろう。

隊服のまま、息を切らせた土方がニヤリと笑う。

「別に待ってねーし」

プイッと顔を反らして言えば、土方が少し笑った。

何だか恥ずかしくなってきた俺は、

「ま、上がればいいじゃん」

土方を招き入れた。

テーブルの上の料理を見て、

「これ…」

「あー、飲みに行くのもキツイだろうから、今日は此処でパーティ

「だ」

土方に言うと

「ありがとう、銀時」

ごめんな？遅くなって

なんて頭を撫でられると、押さえ込んでた寂しさが溢れてきて。

泣きそうな顔は見られたくないから、土方に抱き付いて

「……………バカ」

胸に顔を埋めて呟く。

土方はずっと頭を撫でてくれていた。

「でも、来てくれて嬉しいよ」

こんな日だから少し素直になって見たけど、やっぱり恥ずかしいや。

俺はもっと強くしがみつき、土方の匂いを胸一杯吸い込む。

時計の日付はもう変わっていた。

M e r r y X · m a s

夕暮れマジック

・夕暮れマジック・

超短文です。

暮れも押し迫ったある日の夕方。

珍しく仕事が早めに終わった土方は、急に思い付いて万事屋へ来ていた。

ピンポンも鳴らさず玄関を開け、

「ただいまー」

土方としてはほんの冗談のつもりだったのだが、

「おかえりー」

と、当たり前のように返されて。

毎日こんな風に暮らしたいなんて思ってしまった。

「〜っ!ぎんっ!俺と結婚してくれ!」

なんて、思わず口走ってしまっ。

そんな、不思議な夕暮れマジック。

奥の奥まで

・奥の奥まで・

チャリン

万事屋に響く金属音。

「あ、やべっ」

急に銀時が声を上げた。

「どうした？」

「いや、棚の裏にバイクの鍵落としちゃった」

銀時は棚の裏に手を差し込み、取ろうと試みるが

「ダメだ。ギリ届かねえ」

取れなかったらしい。

「しょうがねえなあ。退いてみる」

しぶとく粘っている銀時を退かし、俺が手を突っ込んでみる。

「くうっ、微妙に届かねえ」

その時

「土方、もつと奥までっ」

棚の上から除き込んでいた銀時の声。

その言葉に、カ一杯伸ばしてた腕を思わず緩めてしまう。

「違っっ、もつと奥の方っ」

……こんな事でこんな事考えるなんて、自分でもどうかしてるとは

思うが

「…銀時、さっきのもう一回言ってくれないか？」

頼んで見ると

「もっと奥の方まで？」

普通に言ってくれる銀時。

『何だこの妙なエロさはああ！ヤバイ俺の妄想がヤバイ！』

目一杯腕を伸ばしながら、そして伸びそうになっている違う部分を
必死に押さえながら心の中で叫ぶ土方であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5161z/>

罪深く悩み多き我等

2011年12月25日18時48分発行